

日本アメリカ史学会 第 45 回例会（7 月例会）記録

会場：明治大学駿河台キャンパス

日時：2019 年 7 月 13 日（土）

合評会 貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』（岩波書店、2018 年）

報告者

貴堂嘉之（一橋大学）

コメンテーター

中野耕太郎（大阪大学）

今野裕子（亜細亜大学）

飯島真里子（上智大学）

司会

兼子 歩（明治大学）

本例会では、貴堂嘉之『移民国家アメリカの歴史』（岩波書店、2018 年）の合評会を実施した。当日は、著者の貴堂嘉之氏に加え、関連分野のコメンテーターとして中野耕太郎氏、今野裕子氏、飯島真里子氏に登壇して頂いた。

最初に司会の兼子歩氏が趣旨説明をした後、貴堂氏が本書の紹介を行った。出版のきっかけとなったのは 2016 年夏に執筆依頼を受けたことであり、本書は岩波書店で現在進行中のプロジェクトである通史アメリカ史シリーズの出版と並行して執筆されたものである。ドナルド・トランプ政権の発足、ヘイトクライムの蔓延、日本の改正入管法などの現象を受けて、過去に貴堂氏は兼子氏との共編で『「ヘイト」の時代のアメリカ史—人種・民族・国籍を考える』（彩流社、2017）を出版している。その意図は反差別のアクチュアリティや歴史修正主義に抗う歴史実践にあり、本書の出版も同一路線に位置付けられる。本書の出版後、市民・高校生向けの講演会や他の学会報告を通じて、学問と社会が繋がる感覚を得たという。

『移民国家アメリカの歴史』の目標として、「移民国家」神話の解体、「長い 19 世紀」という時代設定の下に自由/不自由労働者の人流をグローバル・ヒストリーの枠組みで捉える視座の提示、「門衛国家」としての移民国家論の前景化、「奴隷国家」から「移民国家」にシフトする歴史像の構築、中国人移民史を扱ってきた研究者として日本人移民史を描き直

すこと等が挙げられた。また、本書の反省点について、各移民集団の同化・アメリカ化の過程、移民史と黒人史の接合に関する叙述が十分ではなかったことに言及し、ヒスパニックやヨーロッパ系を加える新たな歴史像を次世代の移民研究者に期待すると述べて報告を終えた。

第一コメンテーターの中野氏は、アジア系移民の歴史を通して巨視的・通時的視座を示したこと、黒人奴隷の代替労働力として苦力貿易の性格を解明したこと、従来は注目されてこなかった再建期の時代と共和党急進派の役割に光を当てたこと、アメリカの国民神話に対するチャレンジの四点を取り上げた。特に、奴隷国家から移民国家へと転換する時代の流れが非常に明瞭に描かれており、一般の学生にとっても教えられる所が多いと評した。以上の評価を踏まえつつ、第一に中野氏は「長い 19 世紀」論をアメリカの国民国家形成に当てはめることは妥当かという論点を提示した。前工業的・前近代的な時代であり多様な移動の形態が入り混じっていた 19 世紀と、国民国家の成熟と密接に関わりかつ高度に資本主義化された状況で移民問題が発生した 20 世紀を一例に配置することの難しさが指摘された。第二に、本書は脱ナショナル・ヒストリーの書であるか否かが問われた。アメリカ史をナショナル・ヒストリーとして叙述する場合、(1)ヨーロッパ系白人移民の国家と(2)抑圧された者の避難所の二種類が想定されてきたが、本書は(2)に関して否定的な態度は取るものではないことから、中野氏はこの点に関する著者の認識を確認した。これら二点の質問の他に、移民史を叙述する視座としてのローカリティとコミュニティが不在であった点に触れた。

第二コメンテーターとして、日系移民史を専門とする今野氏は、アメリカ史に対する本書の貢献として、黒人奴隷制の廃止と中国系移民の連続性を明らかにしたことを挙げた。従来のアジア系エスニック集団史はアメリカ国内のローカルな政治状況に即して議論されてきた。昨今ではトランスナショナル・ターン(越境論的転回)を経て出身母国とのトランスナショナルな関係性に着目する研究が顕著であるが、奴隷制廃止の問題と合わせて論じることは稀であった。当該分野の古典ともいえる Ronald Takaki の見解を相対化する貴堂氏の主張、Erika Lee や Moon-Ho Jung の成果を挙げ、本書を通してこれらの知見が一般に広がる可能性を評価した。そして、更に掘り下げて論じる価値のあるポイントとして、(1)移動航路としての空間、複数の帝国がせめぎあう地政学上の地場としての側面を持つ「太平洋」を強調する余地、(2)メキシコやカナダなどを射程に含めるボーダー・スタディーズや地域比較の可能性が指摘された。最後に、今野氏は、市民権や人種など日本人読者にとって馴染みが薄い概念についての議論を可能にする本書が学生の教育に資することにも言及した。

第三コメンテーターを担当した飯島氏は、自身が学部生時代に出版されていたアメリカ

史関連の新書を引き合いに出しつつ、『移民国家アメリカの歴史』を、神話化された「移民国家」アメリカ像を実証的に突き崩す試み、移民の排斥と人種化が加速化する現代社会を歴史学の立場から捉えなおす試みとして位置付けた。本書が提示する視点に関して、飯島氏は(1)グローバル・ヒストリーから見るアメリカと(2)アジア太平洋からみたアメリカに着目した。国民国家の枠組みの下に誕生した人文・社会科学の知的様式、ヨーロッパ中心主義に対する批判を主眼とするグローバル・ヒストリーをアメリカ史に導入することで、ヨーロッパ・白人中心主義的アメリカ史からの脱却、異なる地域と空間の対話を可能にした本書に高い評価が与えられた。次に、日米両帝国の影響にあった地域への「人の移動」の視座の重要性を訴える貴堂氏の主張を取り上げ、単なる植民地史的叙述から、複数の帝国による支配と衝突の場としてニュアンスに富んだアジア太平洋像を描く方向性が肯定された。貴堂氏に寄せられた質問として、複数の空間とその同時代性に目配りする歴史学的研究を研究者個人で実行することの課題とその克服方法、アジア系移民史研究においてアジア系研究者による「アジア」的モデルの展開可能性、「移民国家」アメリカの歴史において「移動しない」人々をいかに扱うべきか、という問題が投げかけられた。

中野氏、今野氏、飯島氏のコメントに対して貴堂氏が返答をした後、オーディエンスとの間で活発な質疑応答が行われた。例えば、アメリカ黒人史研究の立場から、苦力と自由契約労働者は苦力制度が廃止された点で実体として何が違っていたのかという質問がなされた。他にも、1930年代アメリカにおける移民コミュニティの一般的状況、中国系移民のトランスナショナリズムと国民国家形成の関係を問うものや、奴隷国家から移民国家へのシフトという歴史像を通して主張したかったことは政体(body politic)の問題であったのかなど、重要かつ興味深い疑問が寄せられた。中でも大きな関心が寄せられたのは、(1)移動しなかった人々や非自発的な移動を強いられた者の存在、(2)グローバル・ヒストリーという空間設定だった。(1)に関して、アメリカ先住民研究者の間では、アメリカは移民国家であるという定義自体を疑う必要性が共有されており、同様に帝国史の視座を重視する者も先住民に対する土地の収奪や黒人の国内移動などを例に挙げ、彼らを「移民国家」アメリカの歴史の中でいかに扱うかが議論された。(2)グローバル・ヒストリーという空間設定の問題では、中野氏が指摘したローカリティに加えてリージョナリティという範囲の有効性についても指摘があった。また、ナショナルな叙述の単位とグローバルな視座との距離感をいかに考えるかという論点が提起された。貴堂氏や中野氏は、グローバル・ヒストリーとナショナル・ヒストリーは二律背反的な関係にあるのではなく、グローバル化と国民国家形成の時期が一致することを考えれば、両者を念頭に置いた叙述が肝要という見解を示した。

最後に、記録者の雑感について若干触れておきたい。本例会では、包摂と排除、同化、

トランスナショナリズム、アメリカ化、シティズンシップなど、アメリカ移民史研究者が重視してきた議論に終始することを想定していたが、アメリカ先住民の歴史性を踏まえた討議が盛んに行われたことが意外かつ印象的だった。移民というカテゴリーに収斂しない多様な移動方法とその存在形態をいかに「移民国家アメリカ」と調和させるかという問題は、尚も豊かな歴史叙述の可能性を残している。21世紀の移民国家アメリカ論を考える上で、本書は一般読者に対して啓蒙的な役割を果たすのと同時に、新世代のアメリカ史研究者にバトンを託そうとしている。本例会は47名の参加者を得て、極めて活況の様相を呈して終了した。

(吉田晋也)